

東日本大震災から1年8ヶ月。茨城県内にも、地震により復旧していない施設があります。一方被災地では、いまだなお仮設住宅にすら入居できず、避難所生活を強いられている被災者が5000人を超えます。

昨年、本校からは3回、有志が集まって被災地へ行き、ボランティア活動を行いました。あれから被災地はどれくらい復興したのだろうか。不安と期待の中、自ら参加を希望した有志25名は再び被災地へ行きました。



午前には、海岸の清掃活動を行いました。放置されたままの倒木。海岸に流れ着いたのか、大きな亀の死骸。一見きれいには見えませんが、砂浜には当時のものと思われるビンやカン、流木で溢れています。骨もたくさん見つかりました。「本当に多くの人々によって清

掃され、ここまでたどり着いた」と話すのは、今回ボランティアバスに添乗していた石塚観光の綿引社長。大津波のあった昨年3月以来、毎週のようにボランティアバスを運行している。今回参加した私たちメンバー、2年生のほとんどが3,4回目。1年生は、1人を除いて全員が初参加でした。



参加していた一般の方々には大変お世話になりました。使用した土のう袋は、小中学生によって、活動する私たちや被災地の人々へのメッセージが書かれたものでした。水戸啓明高等学校からも、昨年に続いて、書きためた土のう袋 200 枚を寄付してきました。「応援しています」「ひとりじゃない」「ファイト！」といったメッセージに、心温まりました。





「ここは住宅密集地でした」—— そう言って連れてきてもらったのは宮城県石巻市。最も被害の大きかった場所の 1 つです。綿引社長の計らいで、午後は石巻市の視察に行くことができました。そこで見たものは、当時の爪痕そのもの。初めて参加した生徒は、自分の目を疑いました。「ここが住宅密集地だったとは想像もつかない」そう言ってカメラを握る私たちに、綿引社長はこう言いました。「皆さんには、この現状を一人でも多くの人に伝えて欲しい。そして、後世にこのことを伝えて欲しい。」「10 年後、20 年後に再びこの被災地を訪れ、自分の目で本当の復興を確認して欲しい。」多くの高校生がボランティアバスに参加しているとのこと。実際に行ってみることが大切だ、と改めて分かった今回のボランティア。1 人ひとりの得るものが多かった機会でした。



<参加した1年生有志>



<参加した2年生有志>

